

平成 22 年 5 月 17 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）  
 研究期間：2008～2009  
 課題番号：20830001  
 研究課題名（和文） 20 世紀ドイツにおけるヨーロッパ統合運動の研究－戦前・戦後の連続性と断絶を中心に  
 研究課題名（英文） A Study on the European Unity Movements in Twentieth Century Germany  
 研究代表者 板橋 拓己 (ITABASHI TAKUMI)  
 北海道大学・大学院法学研究科・助教  
 研究者番号：80507153

## 研究成果の概要（和文）：

本研究は、20 世紀ドイツにおけるヨーロッパ統合運動につき、戦間期からの人的・思想的な連続性という観点に注目し、「ドイツ・ヨーロッパ連盟」という団体（及びその創設者ヴィルヘルム・ハイレ）を中心に検討することによって、積極的にヨーロッパ統合に関与し続ける現代ドイツ政治の思想的・歴史的・社会的基盤の一端を明らかにしたものである。

## 研究成果の概要（英文）：

This study shows that the European unity movements in modern Germany can trace its history back to the inter-war period. In order to show this continuity, this study examines the (pre-) history of the “Europa-Union-Deutschland.”

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	810,000	243,000	1,053,000
2009年度	670,000	201,000	871,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,480,000	444,000	1,924,000

研究分野：ヨーロッパ国際政治史

科研費の分科・細目：政治学・国際関係論

キーワード：ドイツ、ヨーロッパ、統合、国際政治

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、1848 年革命から第二次大戦期までのドイツにおけるナショナリズムと「中欧 (Mitteleuropa)」という地域概念との密接な関係について実証的に研究してきた。その研究過程で気づいたことは、戦間期に「中欧」構想を掲げてヨーロッパ秩序の再編成を要求していた少なからぬ人々が、第二

次大戦後の西ドイツにおいて積極的なヨーロッパ統合推進派として活動していたことである。そのような人物の代表としては、戦間期ドイツ最大のヨーロッパ統合推進団体である「ヨーロッパ協調連盟 (Verband für europäische Verständigung)」の指導者であったハイレ (Wilhelm Heile) が挙げられる。実に彼は、第二次大戦後に「ドイツ・ヨーロ

ッパ連盟」を創設した人物でもある。それでは、戦間期のドイツ中心的な「中欧」を基盤としたヨーロッパ統合構想と、戦後ドイツのヨーロッパ構想にはどのような連関があるのだろうか。この問いが、研究代表者が本研究の着想に至った最初の契機である。そして、こうした問題意識から先行研究を検討していくと、本研究が研究史的にも相当な奥行きを持つことが分かった。そこで次に、本研究の研究史的な位置づけを述べる。

#### (1) ヨーロッパ統合史研究

冷戦が崩壊し、EU（欧州連合）が東方に拡大するとともに、その管轄領域も増大させていくにしたがって、ヨーロッパ統合史研究にも、欧州石炭鉄鋼共同体（ECSC）からEUに至る共同体制度のみに解消されない視点が要請されている。とりわけ、ヨーロッパ統合を社会的レベルで支えてきた「下からの」運動や、それらが担った「ヨーロッパ」理念を再検討する意義が強調されている。しかし、仏伊などに比べると、ドイツのヨーロッパ統合運動を対象とした研究は（おそらくは下記2の理由から）決して豊富とはいえない。本研究はそうした状況を改善するだろう。

#### (2) ドイツ政治外交史研究

戦後ドイツは一貫してヨーロッパ統合に積極的に関与してきたが、その理由について既存の多くの研究は、ナチズムという過去に対する反省と、冷戦という外的状況の拘束から説明し、それ以上の探求を怠ってきたように思える。とはいえ近年、外交史の分野では、ドイツ外交の自主性・内発性を示す研究が現れている。これに対して本研究は、そうした政治外交を支えた、ドイツのヨーロッパ運動・ヨーロッパ主義を分析する。

#### (3) 20世紀政治・社会・経済史研究

また近年、戦後を対象とした政治・社会・経済史の各分野において、戦前からの強固な連続性がしばしば指摘され、議論的となっている。それに伴い、第二次世界大戦という断絶の契機を相対化するような、「20世紀」という長期的な枠組みから歴史を眺める視座が必要とされている。この点で本研究は、主に理念史・運動史という手法から、第二次大戦を一義的な画期としない、長期的な20世紀ドイツ＝ヨーロッパ史を描こうとする試みの一つと位置づけられよう。

### 2. 研究の目的

本研究は、20世紀ドイツにおけるヨーロッパ統合運動を、戦間期からの人的・思想的な連続性と断絶という観点に着目しつつ、実証的に研究することによって、積極的にヨーロッパ統合に関与し続ける現代ドイツ政治の

思想的・歴史的・社会的基盤を明らかにしようとするものである。中心的な検討対象は、第二次世界大戦後のドイツ連邦共和国（西ドイツ）において最大の加盟者数を有したヨーロッパ統合推進団体である「ドイツ・ヨーロッパ連盟（Europa-Union Deutschland）」という団体と、そこに集った人々である。この団体には、設立当初からさまざまな出自・思想の持ち主が集まったが、自由民主主義的なヨーロッパ統合を求めるという点では一致しており、戦後ドイツがヨーロッパ統合に積極的に関与していく政治的・社会的基盤を形成した。本研究の具体的な目的は、以下の3点である。

(1) 戦後ドイツにおけるヨーロッパ統合運動の意義の確定：ドイツ・ヨーロッパ連盟をはじめとするドイツのヨーロッパ統合運動は、外交政策のような領域に比してこれまで研究されることが少なかった。そこで本研究は、ドイツのヨーロッパ統合運動を実証的に検討し、それがドイツ政治に与えた影響、およびヨーロッパ統合史全体に有する意義を確定する。

(2) 戦後ドイツにおける「ヨーロッパ」概念・構想の実態の解明：20世紀のドイツには、多種多様な「ヨーロッパ」概念・ヨーロッパ構想が存在した。本研究は、ドイツ・ヨーロッパ連盟周辺で展開された議論を検討することにより、そうした「ヨーロッパ」概念・構想の諸相とその競合関係を明らかにし、いかなる「ヨーロッパ」像がドイツのヨーロッパ政策を下支えしてきたのかを明らかにする。

(3) 戦前・戦後の「ヨーロッパ」構想の連続性と断絶の診断：戦間期から戦後期までのドイツのヨーロッパ統合運動を通時的に検討することによって、しばしば過度に強調されがちな第二次大戦による断絶の側面を相対化しつつ、戦後ドイツにおけるヨーロッパ理念・構想の変容を、戦前からの連続性と断絶を確定しながら適確に捉える。

以上の3つの目的を達成することによって、20世紀ドイツにおけるヨーロッパ統合運動がヨーロッパ統合史およびドイツ政治史において果たした意義を明らかにする。

### 3. 研究の方法

ドイツ・ヨーロッパ連盟をはじめとするドイツにおけるヨーロッパ統合運動関係の資料の収集・分析。とくに重要な資料としては、連盟の機関紙 *Europa-Union. Offizielles Organ des General Sekretariates des Europa-Union* が挙げられよう。また連盟によ

る出版物（例えば Schriftenreihe der Europa-Union Deutschland シリーズなど）や、主要メンバーたち（例えば数多くの著作を発表している初期の連盟会長コーゴン（Eugen Kogon）など）による著作もある。

#### 4. 研究成果

##### \*2008 年度の研究成果

(1) 本テーマに関する先行研究の中で最も重要なコンツェの研究を批判的に検討し、「ドイツ現代史における「ヨーロッパ」理念の諸相——ヴァネッサ・コンツェの研究によせて」という書評論文を執筆し、『北大法学論集』第 59 巻第 5 号に発表した。これは、Vanessa Conze, *Das Europa der Deutschen* (2005) を手がかりに、20 世紀ドイツにおける「ヨーロッパ」理念の諸相・変遷を、戦前・戦後の連続性と断絶に着目して明らかにし、さらに今後の研究の展望を論じたものである。

(2) 国内外の図書館活用、さらにドイツ出張（2009 年 2 月～3 月）を通じて、本研究の中心的な検討対象である、「ドイツ・ヨーロッパ連盟」関連の基礎的な資料を収集した。

(3) 本研究の中で重要な位置を占めるヴィルヘルム・ハイレの思想について、『中欧』から『ヨーロッパ合衆国』へ？——ヴァイマル期におけるヴィルヘルム・ハイレの欧州統合思想」という論文にまとめ、ドイツ現代史研究会編『ゲシヒテ』第 2 号に発表した。本稿は、ドイツの「中欧」構想と、現代にまで連なるヨーロッパ統合の関係を問い直す試みとして、ヴァイマル共和国期ドイツの代表的な欧州統合運動である欧州協調連盟の指導者であり、第二次大戦後も欧州統合に積極的に関与し続けた人物であるヴィルヘルム・ハイレ（1881-1969）の経歴と思想を、一次資料に基づいて検討したものである。

(4) また、本研究の問題関心の底流をなす近現代ドイツにおける「中欧」概念について、北大政治研究会で報告を行った。

(5) ヨーロッパ統合史研究に関しては、共同執筆で参加した遠藤乾編『原典ヨーロッパ統合史——史料と解説』（名古屋大学出版会）が公表された。研究代表者は特に、「ヨーロッパ統合の前史」とドイツ統一関連史料の翻訳・解説を担当している。

(6) さらに戦後ヨーロッパ史について、ジャット『ヨーロッパ戦後史』の書評を『論座』に執筆した。

##### \*2009 年度の研究成果

(1) 前年度に引き続き、国内外の図書館の活用などを通じて、本研究の中心的な検討対象である「ドイツ・ヨーロッパ連盟」関連資料を収集・分析した。

(2) 本研究のなかで重要な位置を占めるヴィルヘルム・ハイレの戦間期から戦後の思想・活動を再検討した。この成果は、『中欧』と『ヨーロッパ』のあいだ」という小論として雑誌『創文』2010 年 5 月号に発表予定である。

(3) また、戦後の保守派のヨーロッパ像に甚大な影響を与えた国法学者カール・シュミットの「広域秩序」構想について検討し、「第三帝国下の「中欧」の運命——カール・シュミット『国際法的広域秩序』を読む」という論文にまとめ、『新世代法政策学研究』（北海道大学情報法政策学研究センター）第 2 号に公表した。

(4) 本年度の大きな研究成果として、近現代ドイツにおける「中欧」概念についてドイツ・ナショナリズム研究の視角から討究した著作『中欧の模索——ドイツ・ナショナリズムの系譜』を創文社から公刊した。

(5) 最後に、「ドイツ・ヨーロッパ連盟」を中心とした戦後西ドイツのヨーロッパ統合運動についてまとめた（いわば本研究の総括となる）論文を現在執筆中である。この研究成果については、2010 年度日本国際政治学会で口頭報告することをアプライしており、また、近々公刊される予定のヨーロッパ統合史に関する論文集に収録予定である。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

- ① 板橋拓己、「第三帝国下の「中欧」の運命——カール・シュミット『国際法的広域秩序』を読む」、『新世代法政策学研究』、査読有、第 2 号、2009 年 7 月、305-328 頁
- ② 板橋拓己、「『中欧』から『ヨーロッパ合衆国』へ？——ヴァイマル期におけるヴィルヘルム・ハイレの欧州統合思想」、『ゲシヒテ』、査読有、第 2 号、2009 年 3 月、75-84 頁
- ③ 板橋拓己、「ドイツ現代史における「ヨー

ロッパ」理念の諸相——ヴァネッサ・コンツェの研究によせて」、『北大法学論集』、査読有、第59巻5号、2009年1月、257-264頁

- ④ 板橋拓己、「読書空間：トニー・ジャット『ヨーロッパ戦後史』」、『論座』、査読無、第161号、2008年9月、308-311頁

〔学会発表〕（計1件）

- ① 板橋拓己、「『中欧』の模索——ドイツ・ナショナリズムの一系譜」、北大政治研究会、2009年1月22日、札幌北スカイビル

〔図書〕（計2件）

- ① 板橋拓己、創文社、『中欧の模索—ドイツ・ナショナリズムの一系譜』、2010年、総310頁
- ② 遠藤乾編、名古屋大学出版会、『原典ヨーロッパ統合史—史料と解説』、2008年、8-55頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

板橋 拓己 (ITABASHI TAKUMI)  
北海道大学・大学院法学研究科・助教  
研究者番号：80507153

### (2) 研究分担者 なし

### (3) 連携研究者 なし